

# ざっくり 近代日本演劇の流れ

村井 健

## 1:開国

幕末から明治にかけて、アメリカ・ヨーロッパに派遣された使節団、留学生、さらには、1871（明治4）年に行われた岩倉具視・大久保利通らの遣欧米使節団などによって、彼の地で見聞した舞台芸術の情報（オペラ・バレエ・ドラマなど）が盛んにもたらされ、それまで舞台といえば、能、狂言、歌舞伎、文楽といったものしか知らなかった日本の演劇界に大きな刺激を与えることになった。そして始まったのが、歌舞伎の改良である。が、その前に、以下のような通達が矢継ぎ早に発せられたことは意外に知られていない。

1. 1872（明治5）年2月 猿若3座の太夫元および作者3名を東京府庁に呼び出し、貴人や外国人も歌舞伎を見るようになったので、内容をもっと高尚なものにするようにとの「御諭」（おさとし）がある。
2. 同年3月、教部省を新設、芸人・俳優をその監督下におく。
3. 同年4月 教部省に教導職が設けられ、神官・僧侶の有力者を任命する。
4. 同年同月 守田勘弥・河竹新七（黙阿弥）・桜田治助を第一大区役所に呼び出し、歌舞伎は勸善懲悪を旨とし史実に忠実に脚色するようにと説諭。
5. 同年6月 猿若3座の座元を教部省に呼び出し、「狂言仕組台帖」を上演前に差し出し、伺いを立てるようにとの「御達」。
6. 同年9月 劇場を免許鑑札制とし、課税の対象とする。

この一連の通達により、歌舞伎は、勸善懲悪思想に重きを置き（教化）、「巧芸艶色」を排し、「史実」に即した、忠孝・勇武・貞節をテーマにする（皇道思想に添う）よう枠をはめられ、芸人・俳優が「教導職」として教部省の管轄下におかれ、上演脚本の検閲も義務付けられることになったのである。ことに検閲制度は、この後、第2次大戦の終結まで、日本における舞台芸術の思想統制・弾圧手段として使われ続けることになる。さらに、1882（明治15）年2月には、東京府と警視庁から布達された「劇場取締規則」によって、東京の劇場は10座とし、鑑札制度・興行届出制・臨官席設置・定員・興行時間が定められることになる。いわば、日本の「演劇の近代」は、表現の管理・規制と一体化したものとして始まることになる。

## 2:最初の革新者

こうした政府の動きに対し、演劇人の中から、新時代の動きに対応しようという意欲的な人間が出てきた。その人物とは、江戸3座の1つ、守田座の座主・守田勘弥（1846～97）である。守田は、明治政界の実力者・大久保利通とも面識のある演劇人だったが、1872年にいち早く、時代の流れを読み、守田座を浅草猿楽町からより都心に近い新富町に移転し、1878（明治11）年6月に新「新富座」を開場した。この開場式は、ガス灯をともし、陸海軍の軍楽隊の洋楽演奏を行い、三条実美太政大臣ほか政界財界はもちろん、各国大使・公使など1000名を招き、舞台上に並んだ団十郎を初めとする俳優は、散切り頭・燕尾服を着用して整列するという前代未聞のものだった。劇場には、洋式の客席まで常設され

た。いわば、民間の「国立劇場」。事実、新富座は、ドイツ皇帝の孫・ハインリッヒ親王、前アメリカ大統領グラント將軍、フランスのナポレオン親王を同座に迎えての観劇会を次々に行い、「国立劇場」的な役割をはたした。また、ガス灯の導入により、それまでなかった夜間興行を試みるなど、その勢いはとどまるところを知らなかったのである。しかし、その後、守田は多額の負債を抱え、1894年に新富座を手放すことになる。後に、新富座（1909年）は松竹合名会社の手に移るが、1923年の関東大震災で焼失、ついに再建されることはなかった。

### 3:演劇改良会

守田勘弥の欧化熱が冷めた後、明治19（1886）年に作られたのが「演劇改良会」である。これは、伊藤博文の女婿、末松謙澄（のりずみ）の提唱で、井上馨、外山正一、依田学海、矢野竜溪、福地桜痴、森有礼、渋沢栄一など各界の有力者を網羅したものだ。その目的は、脚本の改良、劇作家の地位の向上、洋風新劇場（国立劇場）の建設である。しかし、この会はわずか2年で姿を消すことになる。ただし、このときの新劇場（国立劇場）の建設構想は、後の帝国劇場（現・帝国劇場。現在は東宝の経営）建設へとつながる。

ちなみに、脚本の改良は、まず史実第一の教訓劇、愛国忠臣ものをベースにした「活歴物」として現われた。これを率先して上演したのは、9代目市川團十郎（1838～1903）である。また、5代目尾上菊五郎（1844～1903）は断髪令以降の新風俗を写した新世話物、つまり「散切狂言（ざんぎりきょうげん）」に力を入れる。しかしながら、守田が先導し、団十郎・菊五郎らが試みた歌舞伎改良の試みは、挫折を余儀なくされた。

1つには、時代が大きく変わったことがある。もはやちょんまげ、帯刀の時代ではなく、1871（明治4）年には廃藩置県、斬髪・廃刀が許可され、さらには華族・士族・平民相互の結婚も許可され、社会風俗も江戸時代とは異なる様相を呈してきたからである。歌舞伎の基盤である江戸時代の社会制度や風俗がそもそも成り立たなくなってきた。もし、歌舞伎が現代劇として生き残ろうとすれば、当然、新しい世相・風俗を取り入れるだけでなく、その基盤をなしてきた従来の型や様式をも変えなければならない。だが、翻訳ものの翻案上演、散切り狂言、活歴物の上演もそこまでの「改良」には至らなかった。

活歴物の史実重視の上演は、史実にとらわれるあまり性格描写がおろそかになり、また芝居としての破天荒なストーリー展開などの面白みを欠いたものになった。一方、散切物も、世相・風俗を表面的には取り入れたものの、その内容は旧来の生世話ものと変わらず、七五調の台詞、チョボ入り（義太夫などの語り）と、変わり映えのしないものだったからである。結局、これらの試みは、歌舞伎ではなく、後に台頭する「新派」や「新演劇」に引き継がれることになる。

### 4:新演劇の誕生

「新派」「新演劇」という名称は、歌舞伎など旧来の演劇を「旧派」として、それに対抗するものとして名付けられた名称だが、新派・新演劇は、もともとは自由党の壮士・角藤定憲（すどうさだのり）が、中江兆民（なかえちやうみん）の援助によって1888（明治21）年に大阪で行った「大日本壮士改良演劇会」が始まりとされる。要は、国会開設を控えての自由民権運動の政治的なプロパガンダ（宣伝）劇で、当時は「壮士芝居」「書生芝居」と呼ばれていた。この壮士芝居の一派の中から彗星のように登場したのが関西から東京に進出した川上音二郎である。

1881（明治14）年 明治23年に国会開設の詔勅発布

1882（明治15）年 政党が次々に結成される 板垣退助岐阜で遭難 中江兆民「民約訳解」

- 1883 (明治16)年 新聞紙条例改正
- 1884 (明治17)年 群馬事件、加波山事件、自由党解散 鹿鳴館で西洋舞踏会
- 1885 (明治18)年 第一次伊藤内閣成立
- 1887 (明治19)年 保安条例公布→これにより中江兆民を始めとする有力な自由民権論者がとこ  
ろ払いとなる。
- 1888 (明治20)年 「君が代」制定
- 1889 (明治21)年 大日本帝国憲法公布

## 5:川上音二郎登場

川上音二郎(1864-1911)は、九州・博多生まれ。13歳のときに母が死に、父が後妻を娶ったために14歳で家出して上京。自由民権運動にかかわるようになったのは1882年(19歳)ころからで、京都で「日本立憲政党内閣新聞」の発行名義人になりたびたび投獄された。1882年、川上は言論取締りに反抗し、講談落語で政治宣伝をしようと「自由童子」を名乗り活動するが、85年に京都府知事から演説禁止命令が出たため講釈師(86年)「自由亭雪梅」となるも、86年には大阪の桂文之助の弟子となり「浮世亭〇〇」と改名、改良落語家となり、さらには京都の歌舞伎一座の役者にもなるが、世に出るきっかけとなったのは、1888(明治21)年のことだ。時事諷刺の「オッペケペ」節が大受けに受けたのである。

「権利幸福嫌いな人に 自由湯をば飲みたい オッペケペッポーペッポーポー 固い袴角とれて マルテンズボンに人力車 いきな束髪ボンネット 貴女に紳士のいでたちで うわべの飾りはよけれども 政治の思想が欠乏だ 天地の真理がわからない 心に自由の種をまけ オッペケペッポーペッポーポー」

そのときの扮装は、「緋の陣羽織に日の丸の軍扇」という派手なもの。つまりは時代錯誤ともいえる格好で「演歌によって民権思想を啓蒙した」わけである。勢いを得た川上は、91年に堺で「川上書生芝居」を旗揚げし、1882(明治15)年に実際にあった板垣退助の遭難事件などを元に、「板垣君遭難実記」(1891年)や「佐賀暴動記」(1891年)を上演、人気を得て、ついには東京・中村座に進出した。

売れっ子芸者・奴(後の貞奴)と知り合ったのはこのときのことである。当時、奴の後ろ盾は政界の実力者・伊藤博文だった。奴との出会いは、伊藤やその側近との知遇を得ることにつながり、音二郎は彼らから海外の舞台芸術についてさまざまな情報を得、その目で西欧の実際を見ることを密かに決意する。

1893(明治23)年、音二郎は単身にフランスに渡り、西欧の演劇を視察。帰国後、「オイディプス」などに想を得た探偵劇「意外」「又意外」「又々意外」を上演し好評を博したが、1894年に日清戦争が始まるや、ただちに現地に赴きルポルタージュ演劇といってもいい「壮絶快絶日清戦争」(1894年)や「川上音二郎戦地見聞日記」(1894年)を上演し、絶大な人気を博した。煙幕や花火などを使い、実戦さながらに戦闘場面を再現し、臨場感あふれる舞台を作り出して人気を沸騰させたのである。

音二郎が貞奴(1872~1946)と結婚したのは、この年のことである。媒酌人は伊藤側近の金子堅太郎であった。勢いにのった音二郎は、1896年に私財を投じて、新演劇のための西洋式の劇場「川上座」を東京・三崎町に開場するが、不入りが続き借金を返せず、劇場は人手に渡ってしまう。その後、2度にわたって衆議院選挙に出馬するも落選。音二郎はすべての財産を失う。

1899年4月30日、神戸港からゲーリック号に乗り込み、一路、アメリカに向けて出発する。ちなみに、川上貞奴が、芸名「貞奴」を名乗ったのは、一般にいわれている渡米後のことではなく、この洋行を前に「洋行送別演劇」と銘打った公演を大阪・中座で打ったとき

だったともいわれる（井上精三）。ともあれ、このアメリカ公演とその後続くヨーロッパ公演が、音二郎と貞奴はもちろん、その後の日本演劇に大きな影響を及ぼすことになるとは、当時、誰一人予測しなかった。

**1899年5月23日** 一行19人は、ハワイを経由して、サンフランシスコに上陸。8月シアトル、10月シカゴと、一行の旅は続くが、それは文字通りすきつ腹を抱えての難行苦行だった。その苦境を脱したのは、シカゴでライリック座の公演を行って以降のことである。次の公演地ボストン（12月）で川上は、思わぬ幸運を手にするようになる。シェークスピアの「ベニスの商人」を上演していたイギリスの名優アービング、エレン・テリーと出会い、イギリス公演を勧められるのだ。

**1900年2月6、7日** ワシントンに到着した川上一座は、日本公使館主催（小村寿太郎）の夜会で「児島高德」、「曾我討入」に腹切りの場を付け加えたものと「道成寺」の3本を上演。マッキンレー大統領も出席し、川上は親しく話を交わした。

ニューヨークでは、美少年に恋をして失恋、海に身を投じたといわれる古代ギリシャの女流詩人サッフォーに題材をとったドーデの「サッフォー」を上演し喝采を浴びた。これは、サッフォーとあだ名されたパリジェンヌと法学生ジャン・ゴーサンとの恋の物語である。

川上と貞奴は、このニューヨーク滞在中に、「俳優倶楽部」と演劇学校を見学。化粧から実技指導までを1年生と2年生の教室で見学。型を教えず、観察をベースにした指導に感心した。また演劇学校の卒業式にも出席し、そこに多くの上流階級の人や知名の士が出席しているのを見て、彼等の俳優の社会的地位の違いを実感した。

**1900年4月28日** ニューヨークを立ちロンドンへ。ロンドンでは、イギリスの富豪ヘンリー・ビショップハイムのビュート邸でウエールズ皇太子臨席のもと「児島高德（こじまたかのり）」「芸者と武士」を上演、2000ドルの手形をいただく。

**6月末** パリ到着（パリ万国博会場で公演）。

劇場は、前衛舞踊家ロイ・フラールの劇場（客席500）で万博終了まで公演。連日大入りとなる。演目は「袈裟と盛遠」を元にした「遠藤武者」「児島高德」「芸者と武士」だが、最初入りが悪く、フラールに腹切りを注文された音二郎は、かつての許嫁だった袈裟を誤って殺したため髪を切って出家した「盛遠」に腹を切らせ、「芸者と武士」にも立ち腹のシーンを挿入し血糊をしたたせさせた。ちなみに、「芸者と武士」は、「道成寺」と「鞘当」をミックスしたものだ。「鞘当」は、武士同士が往来で鞘をぶつけたことから争闘に及ぶものであるが、これが大当たりとなったのである。その主な演目と上演ステージ数は以下の通りだ。

「芸者と武士」218回

「袈裟」83回

「児島高德」29回

「左甚五郎」34回

計364回。舞台は、アンドレ・ジイド、ピカソ、ロダンなどに絶賛された。

この万博での活躍で、川上はフランス政府からオフィシエール・ド・アカデミー勲章を授与されることになる。

**1901(明治34)年1月** 神戸に到着。「中央新聞」に1月から3月まで連載した談話を「音二郎・貞奴欧米漫遊記」として刊行する。

しかし、帰国後上演した「洋行中の悲劇」はまだしも、「児島高德」は不評を買う。「洋行中の悲劇」は、創作劇。渡米中の座員2人の死を扱ったもの。

『「ボストン病院の場」の三上丸山両人の病死は殆ど芝居とは思はれぬほど真に迫り満場感に打たれハンケチを放す者なき程なりき』（中央新聞）

と評されたが、「児島高德」は、つたない歌舞伎の模倣とみなされたのである。「これでアービングがと思うと、アービングがただの好奇心から川上をかつぎ回ったのだということがす

ぐに分かった」(「万朝報」)とまで酷評された。

**1901年4月** 川上はロイ・フラーとの契約を果たすため態勢を整えて再度、渡航(一行21名)。6月のロンドン公演を皮切りに→パリ→ベルリン→ウィーン→ブタペスト→ワルシャワ→ロシア→イタリア→スペイン→ポルトガルで公演を行い、帰国する。

**正劇運動** 1902(明治35)年8月に帰国した川上は「正劇」(セリフ劇)を日本に広めることを決意し、

「私の将来期するところは、旧俳優と新俳優の間に、1つ世界的演劇を仕組みたいと思って居ます。それには完全の俳優を養成しなければなりません。……彼女は女俳優を養成える決心で居ります」(1902年9月1日「中央新聞」)

と語った。

その第1回公演に、川上はシェークスピアの「オセロ」(江見水蔭脚色)を選び、1903年2月に明治座で上演した。この時、デズデモーナを演じたのが貞奴である。当時、日本には新演劇の女性の役を演ずる女優がいなかった。1909(明治42)年に、小山内薫と2代目市川左団次が「自由劇場」をつくり、イプセンの「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」を上演(森鷗外訳)したときも、女性の役を演じたのは女形だった。しかし、川上が目指す「正劇」を行う為には女優が不可欠だった。そこで川上は、日本では舞台に上がらない決意だった貞奴に懇願、出演を承諾させ、日本における近代女優第1号が誕生した。

**興行改革と児童演劇** 川上は「オセロ」上演の後、1903年6月には「ベニスの商人」(土肥春曙脚色)を明治座で、同9月には本郷座で「ハムレット」(土肥春曙脚色)を立て続けに上演しているが、注目しなければならないのは、この9月の本郷座での公演で、川上が中銭(なかせん)・茶屋を全廃し、上演時間の短縮など、従来の興行方法の改革を試みていることである。

中銭とは、興行用語で、木戸銭(入場料)や下足料など場内で観客から取る料金のことだ。川上は、上演時間を短縮すると同時に、入場料の低廉化と切符制の採用、客席での飲食の禁止、人力車券の終演前発売、舞台装置を洋画家に依頼するなどの革新を行ったのである。これは、後に2代目市川左団次が1908年に明治座で行って失敗した「劇場改革」に先行する試みだった。

また、川上は1903年10月には同じ本郷座で上演したわが国で初めての、子供のための童話劇「お伽芝居」(「浮かれ胡弓」)を上演している(わが国、児童演劇の初め)。

**4度目の洋行** ところで、川上は1907(明治40)年7月に、4度目の洋行(パリ)を行っている。その主眼は、女優養成所と大阪に本格様式の劇場を作るための「演劇事情の調査・視察・研究」にあった。帰国したのは翌年1908(明治41)年5月である。

帰国した川上は、早速、その見聞を生かし、9月に貞奴を所長とする日本初の演劇学校「帝国女優養成所」を虎ノ門に創設した。日本にドラマ(正劇)を根付かせるためには、まず女優が必要だと考えたからに他ならない。この女優(俳優)の養成は、早稲田の坪内逍遙が文芸協会で俳優養成を開始する前年に当たる。

**新劇場建設** 川上は、1910年3月には大阪に、念願の西洋式劇場「帝国座」を建設、開場している。これは独力での建設であったが、この負債返済のために川上は身体を酷使することになる。翌1911(明治44)年11月11日、川上は腹膜炎のため「帝国座」の舞台で48年の波乱の生涯を終える。

川上は、その性格もあって誤解されることの多い男だったが、いまから振り返ってみれば、まさに日本における現代劇創出のための先駆的な試みを実践した存在だったといえる。事実、川上の正劇運動は、坪内逍遙や小山内薫らを刺激し、わが国での本格的な西欧近代劇の上演、演劇制度の改革をも促すことになったのである。その意味では、川上は単に「新派」の祖というよりはもっと広い意味での「現代演劇の祖」と見なすべき存在だろう。

川上の死後 貞奴は、孤軍奮闘するものの負債を返しきれず、「帝国座」は競売に付され、人手に渡る。その後、貞奴は女優として活躍。1917（大正6）年、明治座での「アイーダ」をもって引退。名古屋に川上絹布株式会社を設立し、その経営の傍ら、1924（大正13）年に「川上児童楽劇団」を結成し、児童劇の普及に努めた。

1946（昭和21）年12月、貞奴は肝臓がんのため熱海の別荘で74歳の生涯を終えた。川上と貞奴のやろうとしたことは、わが国の近代演劇の発展にとって計り知れないものがある。だが、残念ながら、その業績はこれまで正当に評価されてきたとはいえないうらみがある。

## 6:無名の女優・プチ花子

1901年に川上一座が欧米公演から帰国するのと入れ違うようにコペンハーゲンに向かった無名の女性がいた。女性の名は、太田ひさ（1868～1945）。当時33歳だった。彼女の人生は、けっして恵まれたものではなかった。幼い頃から養女に出され、11歳まで旅芸人の子役として巡業。15歳で芸者に出され、その後、結婚・離婚、駆け落ち、男に見捨てられるという苦難に満ちた前半生を送っている。その花子に転機が訪れる。それが、コペンハーゲン博覧会の余興の踊り子として渡欧したことだ。コペンハーゲンでの博覧会終了後、花子は帰国せず、ベルギーのアントワープにとどまり、日本料理店の仲居をしていた。そこに、ドイツ人の興行主が現れ、一座を組んでジュッセルドルフの博覧会で公演することになった。1904年のことである。

ロイ・フラーと契約した花子一座は、北欧から南仏までを回り、1906年の「マルセーユ植民地博覧会」での公演で、ロダンと出会う。花子の舞台（「芸者の仇討」）を見たロダンは、舞台での花子の、桜の木の下で切られて悶死するその表情に魅せられてしまった。これがきっかけとなって、花子はロダンのモデルとなり、ロダンの手になる「死の首」（1908年完成）や「花子のマスク」が作られることになる。

ロダンとの親交は、この後、ロダンの死まで続く。この間、花子は、欧州公演（1908年）、アメリカ公演（1909年）、オーストリア・ドイツ・東欧公演（1909～1910年）を精力的に行うが、旅先のベルリンで夫・吉川薫を失う（吉川とは、フラーの媒酌で1906年に結婚）。このとき、花子はすで42歳だったが、ロダンの励ましもあり、舞台に立ち続け、その公演は、第1次世界大戦中の1915年まで、ロシアを含む全欧に及んでいる。

1917年、ロダン死去の後、花子はフランス政府と交渉「空想に耽る女」「死の首」を入手し、1921年に帰国。静かに余生を送り、1945年4月に岐阜市で死去した。帰国後、舞台に立つことはなかった。

## 7:新派の台頭

**済美館** 川上音二郎たちが渡米したのは、1899年。1901年1月にいったん帰国するものの、川上たちは同年4月、再びヨーロッパへと旅立つ。そのヨーロッパ巡演を終えて帰国するのは1902年8月のことである。足掛け4年に及ぶ川上の留守中に日本の「壮士芝居」に端を発した「新演劇」は思わぬ方向へと動く。

もともと壮士芝居は、自由民権運動に根ざしたものだが、そうした政治的な主義主張とは一線を画した流れが形成されることになる。その魁（さきがけ）をなしたのは、音二郎と肌が合わず川上座を飛び出した伊井蓉峰（ようほう）が、依田学海の支援を受けて1891年に旗揚げした「男女合同改良演劇」を標榜した「済美館」である。旗揚げ公演は、依田学海作「政党美談淑女操」。わずか15日間の公演だったが、1629年の「女芸人禁止」以来、262年ぶりの男女合同公演という点でも画期的なものだった。ただし、「済美館」そのものは、

この公演後解散してしまう。しかし、伊井はその後も河合武雄と組んで近松研究劇公演を1902年に立て続けに9本上演する（「心中天網島」等）など新演劇の芸術的な探求を精力的に行う。ちなみに伊井は、翻案劇「該撒（シイザル）奇談」（「ジュリアス・シーザー」）を1901年に明治座で上演している。当時東大の学生だった小山内薫が森鷗外の実弟・三木竹二の紹介で伊井の一座に加わるのは1904年のことである（1907年退座）。小山内は、伊井の一座でドーデの「サッフォー」や「ロメオとジュリエット」（1904年）、島崎藤村の「破戒」（1906年）、「吾輩は猫である」（同年）も演出している。

**成美団** こうした伊井の活動とは別に、1896年に大阪の角座で高田実・喜多村緑郎を中心に、「大仰な壮士芝居的演技を排し、写実芸を探求しよう」（大笹吉雄）として「成美団」が、旗揚げしている。その第1回公演は「明治四十余年」「讃岐七人斬」。これが好評を得て、同年12月には泉鏡花の「滝の白糸」を上演。これも好評を得た。しかし、1898年に高田は歌舞伎の演技（5代目菊五郎などの演技）に範を求める喜多村と衝突、一時、川上座に加わったため解散となる。

第2次成美団が結成されるのはその2年後（1900年）。大阪の朝日座を常打ち小屋に喜多村たちの上演が続くが、新派が1つの潮流をなすのは、喜多村が10年ぶりに東京に戻り、新派俳優たちが大合同した1908年の東京座での「東風（こち）物語」（佐藤紅緑作）からだろう。同年9月には泉鏡花の「婦系図」が上演され、伊井蓉峰が早瀬主税を、喜多村がお蔭を演じた。かつて近松を盛んに上演した伊井も、喜多村同様5代目菊五郎の影響を受けた俳優だったが、この後、「不如帰」「金色夜叉」「婦系図」など、明治近代の中に根深く存在する「家父長制度」を是認する社会風俗劇を、歌舞伎の現代劇化された様式（なかでも、女形の存続）で演ずる方向へと進むことになる。後に、水谷八重子（初代）が登場し、女形芸を女優の芸に取り入れたりもするが、その基本様式はいまも変わらない。

## 8:2世市川左団次と自由劇場

初期の演劇改良運動は、もっぱら当時唯一の現代劇だった「歌舞伎」を対象に行われ、その当事者は12代目守田勘弥や9代目市川團十郎、5代目尾上菊五郎だった。しかし、それらの改良運動は、いずれも不首尾に終わり、実質的な改良運動は、むしろ壮士芝居の川上音二郎によって行われつつあった。ところが、1900年代に入って、歌舞伎界から思わぬ人物が登場したのである。その人物とは、歌舞伎俳優で明治座の座主でもあった2世市川左団次（1880-1940）である。

父・初代左団次が亡くなったのが1904（明治37）年。2代目を襲名した左団次は、1906（明治39）に父の追善興行を行った後、ただちに父と親交のあった松居松葉の待つヨーロッパへ演劇視察に出発する。左団次は帰国後の1909（明治42）年に、後の築地小劇場の創立者の1人である親友の小山内薫（1881-1928）とともに「自由劇場」をつくり、イブセンの「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」を上演（森鷗外訳）することになる。ただし、この時の舞台では、女性の役は女形だった。続く、1910（明治43）年5月の第2回公演でチェーホフの「犬」（「結婚申し込み」）を上演。12月の第3回公演では、ゴーリキーの「夜の宿」（「どん底」）を上演した。ちなみに、チェーホフやゴーリキーの同時代戯曲が日本で上演されたのはこの時が初めてである。

一方、左団次は、自由劇場立ち上げの前年、08年に自分の劇場である明治座の改革に取り組む。これまでの茶屋制度（出方、中銭など）を改革し、チケットを劇場でオープン販売するという画期的な試みだった。もちろん、これは欧米での見聞を基にした改革だったが、茶屋やそこに出入りする業者などの反感を買い、公演の妨害、暴力沙汰まで発展し、ついに失敗してしまう。茶屋制度と密接に絡みついた壁は左団次が思った以上に厚かったのである。

しかし、この時期、左団次は燃えていた。劇場改革には失敗したものの、自由劇場立ち上げの09年には、100年間上演されることになかった歌舞伎18番の「毛抜」を岡鬼太郎（画家・岡鹿之助の父、劇評家）の脚色で復活上演、翌年には「鳴神」も復活上演する。そして1911（明治42）年には、父同様、幕外作家の岡本綺堂の「修禅寺物語」を上演するなど、その活躍は、多岐にわたる。ただ、この活躍とは別に、明治座の経営は難しく、1912年に、やむなく人手に渡ることになる。

ところで、左団次を語る上で欠かせないのは、なんとと言っても1928（昭和3）年のソ連訪問だろう。小山内薫の仲介により、ソ連政府から歌舞伎公演を依頼された左団次は、一門を率いてモスクワ・サンクトペテルブルク（当時はレニングラード）で初めての本格歌舞伎の海外公演を行ったのである。このときの出し物は「仮名手本忠臣蔵」「鷺娘」「番町皿屋敷」「娘道成寺」「鳴神」など10本。モスクワでは第二芸術座（支配人は俳優のミハイル・チェーホフ）、ポリショイ劇場で、サンクトでは国立オペラ劇場での上演だった。いよいよ帰国という日、モスクワ芸術座でスタニスラフスキーと面談、その時のことを左団次は、

「近代劇のこと、腹芸のこと、歌舞伎の型のこと、その舞台構成術のこと、彼我の子弟養成法のこと、それから、それへと尽きるところがない」（『左団次自伝』）

と記している。ちなみに、この時のソ連公演の先導役を務めたのは、かつて築地小劇場の創立にもかかわった浅利鶴雄（左団次の妻の兄弟）で、劇団四季の浅利慶太はその息子である。

## 9:坪内逍遙と文芸協会

大きな流れで見れば、川上音二郎たちによる「正劇運動」は、歌舞伎の子であった2世市川左団次をして西欧演劇との出会いと自由劇場の誕生を導き出したといえなくもない。が、ここでもう1つ無視できないのが、坪内逍遙と文芸協会（前期と後期に分かれる）の流れである。

**坪内逍遙**（本名は雄蔵、1859～1939）は、明治期を代表する英文学者で、作家、翻訳家、劇作家、評論家である。父は尾張藩士で、東大の政治学科を卒業後、日本最初の小説論「小説神髓」（1885～86年）を発表し、心理主義的写実小説（ノベル）の創造を主張、日本の近代文芸に大きな影響を与えた。東京専門学校（現・早稲田大学）で教鞭を執り、シェークスピアの翻訳・研究を進める傍ら、早稲田大学文学科の創設にも尽力、後に日本で初のシェークスピアの個人全訳という偉業を成し遂げている（1934年完成）。現在・早稲田大学構内にある演劇博物館は、坪内の業績をたたえ1928（昭和3）年に完成したものの。ロンドンのフォーチュン座を模した建物で、その入り口にはラテン語で「全世界は劇場である」と記されている。

**前期文芸協会** 1906年に坪内逍遙は、島村抱月の立言により文芸協会を創立した。これは、ある意味、日本の文化芸術の拠点構想といってもいいものだった。大隈重信を会長に、坪内はもちろん、高田早苗、鳩山和夫、三宅雪嶺、坪井正五郎など錚々たる人物たちが発起人に名を並べている。が、実際の活動は演芸部門の試演が中心で、それも次第に間遠になった。そこで、09年にこれを改組。坪内の邸内に付属演劇研究所を設立して演劇を中心にしたものにした。

これを「**後期文芸協会**」と呼ぶ。このとき、俳優の養成も行い、ここから後の松井須磨子、澤田正二郎らが巣立つことになる。日本で最初にできた近代劇の俳優養成所は、1908年9月に川上音二郎・川上貞奴が開設した「帝国女優養成所」（所長・貞奴）だったが、これは女優のみに特化したものだった。男性俳優の養成所は帝国女優養成所の3ヶ月後の11月に、やはり川上一座のメンバーだった藤沢浅二郎（1866～1917）の開設した「俳優養成所」である。

後期文芸協会の養成所は2年制で、第1回試演が行われたのは1911（明治44）年。上



演されたのは坪内演出の「ハムレット」で、世評もよく、興行的にも成功した。続く第2回公演「人形の家」(島村演出)が11月に帝国劇場で行われ、これがさらに大きな反響を呼んだ。ノラを演じた松井須磨子が一躍、新時代を担う女優と目されたのである。この後、1912年5月にゾーダーマンの「故郷」(英訳「マグダ」)を有楽座で上演、これもヒットした。しかし、この間に、島村と松井の恋が発覚。島村の辞職、松井の論旨退会となり、文芸協会は事実上解体してしまう。しかし、ここから、やがて無名会・舞台協会・近代劇協会などが生まれ、日本の新演劇は新たな展開を迎えることになる。なかでも、ひとときわ、注目を浴びたのが、文芸協会を退会した島村・松井が結成した「芸術座」である。

## 10: 島村抱月と芸術座

文芸協会を1913年に脱退した島村抱月(1871~1918)・松井須磨子(1886~1919)は、中村吉蔵、楠山正雄、水谷竹紫を文芸部に、俳優には研究生だった沢田正二郎(1892~1929)や倉橋仙太郎らを迎え「芸術座」を創立する。第1回公演は13年9月に有楽座で上演されたメーテルリンクの「内部」と「モンナ・ヴァンナ」だった。しかし、この公演は大入りにもかかわらず赤字という結果に終わり後始末に苦労した。マネージャー(製作者)に人を得なかったためである。しかもこの後、第3回公演「復活」の稽古中に松井の横暴が原因で沢田・倉橋・秋田が退団するという問題も起きた。

しかし、そうしたごたごたはあったものの、この「復活」上演が、空前の大ヒットとなり、芸術座は全国公演を行うことになる。芸術至上ではなく、大衆の理解できるようにメロドラマ仕立てに翻案し、劇中に中山晋平作曲の「カチューシャの唄」を挿入したこともヒットの大きな要因だった。

芸術座は、日本国内だけでなく、満州・朝鮮までも巡業している。当時としては画期的なことだが、こうした巡業公演で得たお金で島村は、1916年に牛込に土地を求め「芸術倶楽部」を作り、文芸協会でも果たせなかった「文化サロン構想」を現実のものにしようとした。しかし、これからという矢先の18年11月、島村は当時猛威を振るったスペイン風邪にかかり急死してしまう。松井も、翌年1月に後追い自殺を遂げ、ここに芸術座は幕を閉じることになる。

## 11: マルチ人間・小山内薫

川上、坪内、島村、左団次と同じ時代を生きたもう1人の重要な人物がいる。小山内薫(1881~1928年)である。一口でいえば、小山内薫は、早すぎたマルチ人間である。肩書きをざっと並べれば、劇作家、演出家、小説家、評論家、映画監督、ラジオ・ドラマの演出、翻訳家など、文字通りその活躍は多岐にわたっている。東大在学中に森鷗外に認められ、1907年に「新思潮」を創刊。イブセンの作品やゴードン・クレーグの演出論を精力的に紹介した。そして、1909年に友人、2代目市川左団次と自由劇場を創立、19年の解散まで9回にわたる公演を行い、日本の近代劇の発展に尽くした。

1912(明治45)年に小山内は初めてヨーロッパの演劇視察に出かけている。彼は、シベリア経由で、まずモスクワに立ち寄る。この25日間のモスクワ滞在中、小山内はモスクワ芸術座などで、20本の舞台を観劇している。ゴースト「どん底」(2回)、チェーホフ「桜の園」「3人姉妹」「ワーニャ伯父さん」「ハムレット」(ゴードン・クレーグとスタニスラフスキーの共同演出)などだ。なかでも「どん底」は、自由劇場で、手探りで自ら演出した作品(「夜の宿」のタイトルで上演)だったために、その彼我の差に愕然とした。衝撃を受けた小山内は、モスクワ滞在中、連日モスクワ芸術座に出かけ丹念にメモとスケッチを取り、

それを元に、帰国後に「夜の宿」を再演することになる。

このモスクワ滞在中、小山内はスタニスラフスキーの自宅に招かれ、親しく話すことができた。この時のスタニスラフスキーとの会話には次のようなエピソードがあった。貞奴の話題が出た後で、スタニスラフスキーに花子のことを聞かれた小山内は、

「私はもういても立ってもいられません。私は日本中の恥を一人で背負って立ったような気がしました。私は真赤になりました。『そんな人の名は日本で聞いた事ありません。』私は冷汗をかきながら、やっとこれだけ言いました」（「ロシアの年越し」）と記している。

もちろん、小山内は花子の舞台を見ていない。しかし、歌舞伎役者でもない無名の役者がヨーロッパでもてはやされ、川上一座同然の「歌舞伎まがい」の芝居をしている、そのことに「いたたまれない」思いを味わったのである。この「いたたまれない」は分からないではない。しかし、それは、異文化接触もしくは異文化交流によくついて回る問題でもある。

ところで、ロシアを後にした小山内は、その後、ドイツを中心にヨーロッパ各地の演劇を視察し、帰国後の1913（大正2）年10月に第7回公演で早速「夜の宿」（「どん底」）を再演し、好評を得る。

1924（大正13）年、小山内は、年下の友人・土方与志（ひじかた・よし）とともに、築地小劇場の創立に参加する。これ以後、築地小劇場は1929（昭和4）年の分裂までの5年間に膨大な数の内外の戯曲（84回の本公演を持ち、計117本もの作品）を精力的に上演することになる。そして、ここから戦後日本の現代劇を指導することになる多くの演出家・舞台美術家・俳優を輩出した。

1927（昭和2）年、小山内は「ソ連革命10周年」に秋田雨雀や米川正雄らとともに招かれ、このとき初めてメイエルホリドに会い、以下のような感想を書いている。

「メイエルホリドは、役者の肉体をあらゆるプロバビリチにおいて駆使しようとする。最大限において人間の運動を効果的に利用しようとする。これがいうところのビオ・メカニズム（ビオメハニカ）である。それがアクロバチック（軽業）の域まで進入していることは、日本の歌舞伎と同様である」

また、メイエルホリド劇場での講演で、

「もはやヨーロッパの劇場は死んでいます。だから、日本やシナやロシアなど互いに提携して立派な劇場を創造したいものです」

とも語っている。だが、小山内は帰国後、体調を崩し、1928年12月に急死。鼎を欠いた築地小劇場は、翌1929（昭和4）年に分裂することとなる。

## 村井 健 Murai Ken

## 演劇評論家

日本文芸家協会会員、社団法人「日露演劇会議」専務理事、紀伊國屋演劇賞審査委員、テアトロ新人戯曲賞選考委員。

淑徳大学非常勤講師、新国立劇場演劇専門委員、新国立劇場演劇研修所・JOKO演劇学校講師、05年度文化庁文化交流使（派遣国ロシア）、NHK「シアター・コレクション」オフィシャル・アドバイザーなどを務める。

著書『シチュアション』（五柳書院）ほか。

1946年秋田生まれ、明治大学文学部卒。